

# 描かれた松戸

## 園芸学校、古ヶ崎、矢切の渡しなど

洋画家の石井柏亭は、『美術日記』（1928年、中央美術社刊）という編著書に全国の鉄道沿線の「写生地案内」を掲載しました。松戸については「常磐線」の項の冒頭に、東京近郊の風光明媚な地として、特に画家に好まれたスポットを2か所紹介しています。

「松戸 園芸学校の牡丹は東京附近で第一。松戸町から岐れて流山街道に近く水郷的の好画材がある。」

このうち「園芸学校」は、現在も千葉大学園芸学部として松戸に存続しています。構内の牡丹園（現存せず）は「西の長谷寺、東の園芸学校」と言われるほど広く知られていたそうです。石井柏亭自身も描いています。

園芸学校では、構内のフランス式庭園を田中寅三（no.6）、板倉鼎（no.15）、竹内栄三郎（no.85）が描いています。

石井柏亭の引用文の後半、「松戸町から岐れて流山街道に近く水郷的の好画材」とは、古ヶ崎のことと思われます。古ヶ崎については、板倉鼎の妹の板倉弘子さんが「江戸川の放水路・坂川の畔の古ヶ崎は、今ではすっかり住宅地になってしまいましたが、当時（大正末年頃）は水辺に緑陰が迫る綺麗な場所で、そんなに広くはありませんでしたが、親しみの持てる雰囲気の良い所でした」（「兄 板倉鼎の思い出」2004年）と証言しています。板倉鼎のno.16は古ヶ崎を描いたと思われます。

田中寅三と板倉鼎は、古ヶ崎や江戸川、坂川の美しい水辺の風景を好んで描きました。

ほかに、徳川幕府が設けた利根川水系の河川の渡し場のひとつ、「矢切の渡し」に取材した奥山儀八郎（no.52）と及川修次（no.93）の2点には、舟運の盛んだった時代の名残がとらえられています。また長田国夫（no.76）と竹内栄三郎（no.86）の作品には、緑豊かな農村として長い歴史を紡いできた松戸の姿がとどめられています。



《風景 秋更け行く》を制作する板倉鼎。  
1920年11月。  
当時東京美術学校の2年生だった。